

工人（たくみ）の知恵

奨励	森 一郎【もり・いちろう】
奨励者紹介	同志社大学理工学部嘱託講師 同志社女子中学校・高等学校嘱託講師 元同志社女子中学校・高等学校校長

体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼（バプテスマ）を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。体は、一つの部分ではなく、多くの部分から成っています。足が、「わたしは手ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。耳が、「わたしは目ではないから、体の一部ではない」と言ったところで、体の一部でなくなるでしょうか。もし体全体が目だったら、どこで聞きますか。もし全体が耳だったら、どこでにおいをかぎますか。そこで神は、御自分の望みのままに、体に一つ一つの部分を置かれたのです。すべてが一つの部分になってしまったら、どこに体というものがあるでしょう。だから、多くの部分があっても、一つの体なのです。目が手に向かって「お前は要らない」とは言えず、また、頭が足に向かって「お前たちは要らない」とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。わたしたちは、体の中でほかよりも恰好が悪いと思われる部分を覆って、もっと恰好よくしようとし、見苦しい部分をもっと見栄えよくしようとします。見栄えのよい部分には、そうする必要はありません。神は、見劣りのする部分をいっそう引き立たせて、体を組み立てられました。それで、体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。一つの部分が苦しまば、すべての部分が共に苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分が共に喜ぶのです。

（コリントの信徒への手紙一 12章12－26節）

大工仕事が好き

おはようございます。今、司会の方から紹介していただきました、森一郎と申します。よろしく願いいたします。長らく同志社女子中学校・高等学校で理科・化学の教師をしておりました。定年退職を迎え現在は嘱託講師として同志社女子中学校・高等学校と同志社大学でお世話になっております。

12月25日は降誕祭（クリスマス）で今週は待降節（アドベント）の第一週目になります。一昨日の2日にはこの京田辺校地でもイルミネーションの点灯式もあり、いよいよクリスマスを迎える雰囲気が高まってきております。

さて、皆さんはどんな趣味をおもちでしょうか。また、何が得意でしょうか。人それぞれいろいろな違いがあって、それぞれ特性を生かしておられますか。

私は大工仕事が好きです。子供のころから大工さんが家の修理に来られるのが楽しみでした。来られるとその仕事ぶりをずっと見ていました。金づち、鋸（のこぎり）、鑿（のみ）、鉋（かん）など道具をどんな風に使っておられるか。また、近所に竹屋さんがあって学校の行き帰りに、いろんな竹細工の仕事もよく見ていました。竹を鋸で切るのはどうする、ドリルで穴を開け、小刀でいろいろ細工して、袖垣にしたり、飾りのついた花瓶を作ったりと、それら見たものを真似をして自分なりにやり方を覚えてきました。もちろん、怪我も何度もしましたし、やり方は友だちと情報交換もしました。その結果、道具の使い方を、そして、どのような方法に必要な「物」を作っていくのかを覚えました。鳥かご、棚、物入れ、ついは山小屋なども作りました。

法隆寺の宮大工

そんな関係もあってか、西岡常一（つねかず）さんの体験を記した書『木のいのち木のこころ 天』（草思社 1993年）に接したとき、非常に感銘を受けました。西岡さんは奈良法隆寺の最後の宮大工棟梁と言われた人です。棟梁ですから、仕事の際には何人もの宮大工のまとめ、指示する役です。西岡さんは法隆寺の解体修理を始め、薬師寺の金堂や西塔、法輪寺の三重塔など、飛鳥時代の木造建築に棟梁として携わってこられた方です。この書にはそれらの仕事のなかで、特に法隆寺の解体修理（昭和9年から20年間）で、飛鳥時代の工人（たくみ）の仕事を見て気づかれ、木の扱いを学んでこられたことが書かれています。

法隆寺は607年創建の飛鳥時代のお寺で、一度焼けていて、670年に再建されたと言われています。再建以来でも1300年以上は経つ、世界最古の檜造りの木造建築です。建立以来、今日まで記録によると数十回の大きな地震がありましたし、大きな台風も数え切れないほど経験したに違いありません。もちろん、被害を受けそのつどに小修理はあったとは思いますが、それでも今もなお当時の木材で建っているわけです。それだけ飛鳥時代の工人の技術は強いということを歴史という時間が証明しているのです。

飛鳥時代の工人の知恵

西岡さんは法隆寺の金堂や五重塔の解体修理で、建築の部材（部品）、柱、屋根を支える梁（はり）、それを受ける肘木（ひじき）や斗（ます）の処理を見て当時の技術を知り、飛鳥時代の工人と無言の話をし、教わったと言っておられます。

法隆寺の伽藍を構成している金堂、五重塔、あるいは回廊の木材の部材（建物の部品）には一つとして同じものがないそうです。まったく不ぞろいな部材からできているのです。というのは、法隆寺の建られたころにはまだ「たて引き」の鋸はなかったのです。「たて引き」の鋸は鎌倉時代の末か室町時代の初め（700年から800年前）からで、（この時代以降の修理された部材は寸法で合わせて組んでゆくので、揃ってくるのです。）従って、飛鳥時代は、大きな木に楔（くさび）を打ち込んで縦に割って、柱、梁、板を作っていたのです。主となる柱も樹齢1200年の檜の太木を二つに割ってカマボコ型の三方を斧で削って四角い柱にして工事現場に運び、有名なエンタシス（胴張り）の形に檜鉋（やりがんな）で削って形を整えている。屋根を支える「梁」、それを受ける「肘木」（梁の受け）、「大斗（だいと）（おおます）」（柱の受け）は、組み木になって柱に重みを集中する（お寺の屋根の下を組み木のやり方）。「梁」「肘木」「大斗（おおます）」これらも原木を割ったものを「鑿」や「檜鉋」で削って作っているので一つ一つ形や大きさが違う。

木を割って使うというのは、木目にそって割れるので、寸法の同じ大きさのものは作れないが、細胞を無理に潰すのではなく、木の性質を示す繊維（導管、師管）が生かされているということです。割った木の形を生かしながら、組み木の形に整えていく。合わせる木も元の形を生かしながら合うように整える。ねじれ曲がった木は曲がって割れるが、その形を生かしながら檜鉋で削って組み合わせていく。そうして建物ができあがっていく。

西岡棟梁の唯一の内弟子の小川三夫さんは言う。「千三百年以上経っている法隆寺の部材には一つとして同じ物がないんだ。というのも、あの頃は縦引きの鋸がないから、楔（くさび）を打ち込んで木を割って柱や梁や板を作ってたんだ。肘木も升もみんなそうやって作ってある。（中略）法隆寺なんかは、不揃いの部材でできてるということや。それでも千三百年持つてんだ。もしかしたら、それだから千三百年持つてるのかもしれん。木を割るというのは木の繊維を生かすことや。性質を無理に寸法に合わせてないんだ。」（小川三夫『棟梁』文藝春秋 2008年）

宮大工棟梁の口伝（くでん）

法隆寺の棟梁だけに伝えられた口伝（親方が弟子に口づたえて伝える技術の奥義）に「堂塔建立の用材は木を買わずに山を買え」とあるそうです。

山に行って生えている木の状態を見て、その木の使い道を決めなさい。木は移動することができない。そこで与えられる環境で育つ、それがその木の性質を決めるわけです。自分で行って、地質を見、環境による木の癖を見抜いて買いなさい。山の中腹以上の木は日当たりも良く、風も強いのでしっかり育つから構造材に良い。谷に近いと水も多く木は素直に育ち強さは無い。天井や化粧板に良い。「木は生育の方位のままに使え」。

山に生えている木は動くことはできない。根付いたところで育つ。その場の環境の影響を受けている。西風を受ければ、それに耐えてまっすぐに伸びようとする。日の当たる方には枝がよく出る。建物に使うときにも日の当たるところに使う。柱なども木の生えていたのと同じ東西南北に合わせて使用する。年輪は北が狭くて南が広い。木を切った後もそうなるように配置することが自然の中で木の性質、命を生かすことになる。

「堂塔の木組みは寸法で組まず、木の癖で組め」。

木の癖で左に捻じれを戻そうとする木と、右側に捻じれを戻そうとする木を組み合わせて部材同士で力を癖で封じる。それで建物全体が時間とともにゆがむことを防ぐことになる。

現在の法隆寺

実際に法隆寺でこれらのことを意識して見てみると、回廊で創建当時の連子の格子の木は一本ずつ太さが違うが、全体として見ると違和感はない。後世で修繕したものは太さが同じなのです。柱の礎石は自然石で、石の形や恰好でなく、重心に柱を据え、礎石と柱の接点は石の面に合わせて柱の底面を削る。柱ごとの揺れの向きが異なり全体の強さが増す。

回廊につながる中門の柱は、日の当たる南面の柱は節が多く見えます。飛鳥時代の大工さんは木という材料の性質をよく知ってそれを考え使っている。曲がった木には曲がった木の良さがあってその癖をうまく生かして木組みをしていっている。それぞれの部材（部品）がもてる力を生かして金堂、五重塔、中門、回廊が組み立てられている。そして伽藍は全体としてバランスが取れたものになっている。いろいろな性質の大きさの違う部材が集まり、助け合って強くなっている。だからこそ、強くて1300年以上も地震や台風にもめげずに現存している。考えてみると樹齢1200年の檜の木の命が、今日まで建っており、都合2500年以上も木のもっている命が生かされている。

西岡さんは言います。「近ごろの大工は寸法はやかましくいいますが、木の癖は問題にしていまへんな。寸法どおりに組み上げるのは誰でもできまっせ。そのときの寸法だけでは建

物が長くは持たないことは長いこと大工をやっていたらわかるはずですが、いつまでもそのままですな。建築というものは自然のなかで風雪に耐えねばなりませんのや。木の癖組みを忘れた建築は建築のうちに入りませんで。」と厳しい言葉を発しておられる。

新島襄の思いと相通じる

私はここに同志社教育の考え方に相通じるものがあると思います。同志社は型にはめることは少なく、自由な学園と言われますが、『同志社大学設立の旨意』のなかに「勿論此の大学よりしては、或は政党に加入する者もあらん、或は農工商の業に従事する者もあらん、或は宗教の為に働く者もあらん、或は学者となる者もあらん、官吏となる者もあらん、其成就する所の者は、千差万別にして、敢て予じめ定む可からずと雖も、是等の人々ハ皆な一國の精神となり、元氣となり、柱石となる所の人々にして、即ち是等の人々を養成するハ、実に同志社大学を設立する所以の目的なりとす

一國を維持するは、決して二三英雄の力に非ず、實に一國を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に拠らざる可からず。」（新島襄全集編集委員会『新島襄全集』1 同朋舎出版 1983年）

また、新島先生の手紙のなかにもあります。1889年（明治22年）12月30日（1890年の1月23日に亡くなられたが、その24日前、大磯の百足屋旅館で）、学生の横田（よこた）安止（やすただ）に宛てた手紙のなかに「学校も漸々機械的之製造場ニ漸々流行ハ、生徒の数も増したるより自然之勢ニして止む能ハさる所も可有之候得共、小生平素之目的ハ成丈法を三章二約シ、我力校をして深山大沢之如くになし、小魚も生育せしめ、大魚も自在ニ发育せしめ、小魚大魚各其分に應じ、其身を世に犠牲となし、此美ハしき日本を早晚改良して主之御国、乃チ黄金時代に至らしめん事ハ小生之日夜熱祈して止まざる所なり。」（『新島襄全集』4 1889年）遺言のなかには「同志社ニ於てハ倜儻不羈なる書生ヲ圧束せず務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導す可きし以て天下の人物ヲ養成す可き事」（『新島襄全集』4）とあります。

個人個人のもてる性質を無視するのではなく生かして、その性質に従って力を発揮する。そのことが何よりも大切なのでしょう。飛鳥の工人の知恵は、まさに新島が願った同志社のあり方と相通じるところがあると私は思います。型を重視するのではなく、その分に應じた力を発揮できる自由を大切にすることは、必ずや時を経て大きな力を発揮し、社会に貢献することができるでしょう。

2013年12月4日 京田辺水曜チャペル・アワー
「アドベント讃美礼拝奨励」記録